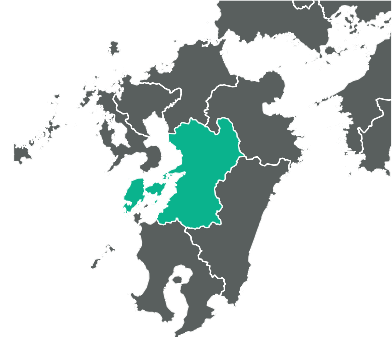


特別公開で見える熊本の今昔。  
清正の仕掛けと匠の技に惚れる

築城400年超の「熊本城」。加藤清正が自らの居城として建てた難攻不落の要塞は県民の誇り。熊本地震からの復旧・復興が進む熊本城の「今」を眺める特別見学通路も必見だ



地域ルポ

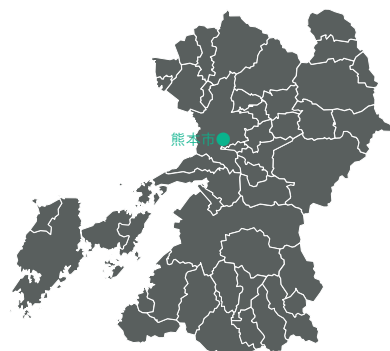
Kumamoto

# 熊本県

多様な関わりから生まれる  
未来志向のまちづくり

九州の中心部、世界有数の阿蘇カルデラを有する熊本県。「火の国」として知られ、火山地層が育む湧水の存在で「水の国」とも称される。農林水産業も盛んで、トマトやスイカなどの日本一の産地でもある。3つの世界遺産と2つの日本遺産に加え、伝統的建造物や温泉なども数多い。

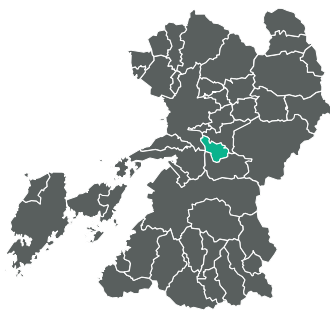
文・木下真弓





# 熊本県

甲佐町



古民家宿「NIPPONIA 甲佐 疏水の郷」。質店からたばこ店へと歴史を紡いだ築130年の建物を改修した。レセプションにたばこ店時代の面影を感じる

## 官民連携のスピード力で 思い出の風景を後世へ。 地元兼業家たちの挑戦



### 一般社団法人パレット

大滝祐輔さん 米原賢一さん

ひとまちづくりに取り組む団体として2018年に発足。多才な兼業家たちが得意分野を持ち寄ることで、古民家宿・飲食店・キャンプ場・やな場・情報発信など活動の幅を広げている

### 歴史を語る水路と古民家 官民連携でスピード向上

九州の中央に位置する甲佐町。町を貫く緑川は九州山地から有明海に注ぐ一級河川で、何度も氾濫を繰り返していた。流域に転機をもたらしたのが、熊本城を築城した加藤清正である。清正は「鵜の瀬堰」を築造し、水路を巡らせて治水と利水を図り、自然と文化が共存する礎をつくった。古民家宿「NIPPONIA 甲佐 疏水の郷」は、町の歴史を語る水路の傍らに佇んで



理事 米原賢一さん  
甲佐町のガス会社の長男として育ち、九州や東京で広告業に従事。2017年に甲佐町へUターンし、大滝さんや家業を継承していた弟らとパレットを設立。主に、クリエイティブやPR分野を担う

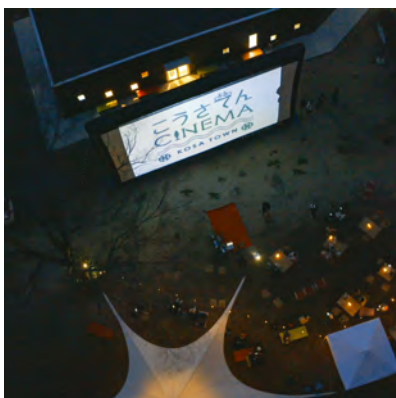
いる。  
甲佐町出身の米原さんはUターン直後、商店街の衰退ぶりに衝撃を受け、大滝さんら志を同じくする仲間と対話を重ねるようになっていった。  
「僕らの本業は、ガスやサッシ、病院事務や公務員など、地域に暮らす人がいてこそ成り立つ仕事。ドラスティックなことをやらないと近い将来、人口減で立ち行かなくなる危機感をみんなが抱いていました」と米原さん。  
まず取りかかったのは、地域スポーツクラブの民営化。放課後子ども教室など、地域の子育て力を向上させる取り組みをスタートした。官民が補完しあって生まれる加速感を求め、次は「甲佐町こうさてんプロジェクト」に参加。熊本地震により被災した古民家の保存と利活用を考えるワークショップで、官民連携が始まった。NIPPONIAを展開する会社と出会ったのもちょうどその頃だ。古民家





左上) 設立当初5名でスタートした一般社団法人パレット。現在は40名以上のスタッフをかかえ甲佐町をさらに盛り上げていく。右上)「KOSA PASS」がゲストとまちをつなぐきっかけに。左下)NIPPONIA内にある「古田パン」。中央下)KOSA PASSでもらえるNEW OLDのハンドドリップコーヒーも人気。右下) 精の瀬堰のそばにあり、殿様遊びのスポットでもあった「やな場」を再生・継承。通年オープンのお店へ

左上)「NIPPONIA 甲佐 疏水の郷」は水の営みを感じる宿。右上)母屋からつながるメソネットタイプの2室と、離れ1室がある。左下)商店街の一角で住民にとって親しみのあるスポット。右下)地元食材たっぷりの朝食。竹箒や窯元特注の小鉢もすべて熊本県でつくられたもの



上から1段目)ファン多数の野外ナイトシアター「こうさてんCINEMA」。2段目)居合切り体験はインバウンド客にも人気。3段目左)古民家宿のゲストがキャンプ場で夕食をとることも可能。4段目右)SUPやカヌーなど、緑川の体験も。4段目)キャンプ場はグランピングやカフェなども併設する「COMMON IDOE」に進化

一般社団法人パレット



「宿泊施設がなく、滞在時間が短いために、イベントが町の経済につながりにくかった。その課題を打開すべく古民家宿の挑戦を決めた矢先、キャンプ場再開発の話も持ち上がりました」と米原さん。「レストランのりノベも同時進行で、毎日が学園

### 地元商店とともに成長 ゆるやかな人口増が目標

を起点に関係・交流人口を創出し、定住人口増を目指す考えに共感した彼らは、NIPPONIAを展開する会社、谷田病院・肥後銀行・商工会・町・パレットの6者で連携協定を結び、甲佐町まちづくり協議会を立ち上げた。大滝さんは「住民の思い出の中に存在する建物を活用することで、地域の取り組みに発展しました」と話す。

「パスは店主とゲストの会話を生み出し、再訪のきっかけになります。町をひとつのホテルととらえ、訪れる人も迎える人も光り輝く「関光まちづくり」を目指したい」とは米原さん。「人口1万人の町を2万人にするため、足りないものは全部作る」と決め、次々と増殖する事

祭みたいでした」と大滝さんは懐かしそうに振り返った。2020年、5ヶ月間で3施設が誕生。コロナ禍のオープンだったが、異ジャンルの施設を持ったことが危機回避につながった。町に好循環をもたらしたのが「KOSA PASS」だ。持参した宿泊者は連携店の特典をもらえるが、代金は同社が精算するため、店の負担はゼロ。町に根ざす彼らならではの配慮が光る。



代表理事 大滝祐輔さん  
家業であるサッポロの仕事をしながら、地域スポーツクラブの運営に携わり、住民や役場職員とのつながりも深い。パレット設立メンバーのひとりとして代表理事を務め、外部との折衝を担当している

「創業から5年で組織も大きくなったので、今後は内部のシステム化も進めつつ、地元店舗と一緒にゆるやかに人口を増やしていけたらいいですね」と米原さんは締めくくった。

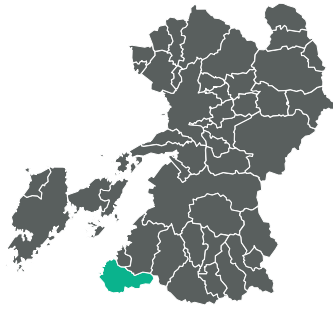
イタリア料理店「trattoria SanVito」。築140年の古民家が「こうさてんプロジェクト」で生まれ変わった





# 熊本県

水俣市



熊本県産のイグサや、国産のヨモギ、レモンガラス、ラベンダーといった和洋のハーブを用いた、お手製の温活アイテム。日々の癒しやギフトにと、求める人も多い

## 韓国からのJターン。 協力隊を経てサロンを開業 ゆるやかな移住者コミュニティも



### リラクゼーションサロン いりおのら®

皆越恵美子さん

韓国語で「ようこそ」を表す「いりおのら」。水俣市の集落の一角にある隠れ家サロンだ。海の見える2階の一室でリンパドレナージュやよもぎ蒸しを提供。地元ハーブの温活アイテムの販売も

地域おこし協力隊として移住。  
自然の中の子育てに感動

熊本県の最南端、鹿児島県との県境に位置する水俣市。高度経済成長期の産業公害を克服し、再び豊かな海を取り戻した水俣は2011年、日本でただひとつの「環境首都」の称号を得た。環境共生型の営みを象徴する地のひとつが「寒川の棚田」だ。

標高300mの山腹にあり、「寒川水源」の岩盤から湧き出す水が400枚以上の田んぼを潤す。石積みで築かれた大小さまざまな棚田を維持するのは並大抵のことではないが、自然と人の織りなす風景の価値が認められ、「日本の棚田百選」にもなった。

この風景を守り継ぐ久木野集

落へ、地域おこし協力隊として移住した人がいる。皆越恵美子さんだ。熊本市の中心市街地で生まれ育ち、エステティシャンをしていた皆越さんは、結婚を機に夫の故郷である韓国へ移住子どもにも恵まれた。だがあるとき、皆越さん一家の平穏な暮らしに変化が現れた。

「子どもが小学生に上がる頃に日本へ移住する予定でしたが、2016年に熊本地震が発生し、とにかく両親の安否が心配で、いつ何があっても支え合えるよう、両親の近くに暮らしたいと考えるようになりました。早速、物件探しを始めましたが、被災地となった熊本市内は極端な物件不足に陥っていました。空き家バンクというシステムで、熊本市へアクセスしやすい周辺の自治体に電話で問い合わせを始めたんです。水俣もそのひとつでした」

このとき、皆越さんが尋ねたのはこの3点だ。空き家バンクの有無・保育園の空き状況・外国人である夫の働く場所があるかどうか。

「電話対応してくれた水俣市の職員さんがとてもいい方で、ここなら夫の仕事や息子の保育園も目処がつきそうだと感じました。私は移住した後にパートを探すつもりでしたが、今、



左)リンパの流れを流すことで心身をリラックスさせるリンパドレナージュ。中上)農家さんから提供いただく和のハーブなど、水俣の土地や人の魅力を生かした体験も人気。中下)ハーブボールづくりなど、各種ワークショップも。右)自宅内の2階に設えたサロン。窓からは海や夕日、肥薩おれんじ鉄道なども一望できる

水俣市は地域おこし協力隊を募集中です。家も用意できますよ」と、予想もしなかったご提案をいただいたんです」

地域おこし協力隊という名称は幾度か目にしたことはあったものの、取り組みの詳細までは知らなかったという皆越さん。それでも、「熊本県で暮らす」という可能性を拓く手段のひとつとして、興味を持った。この

とき募集されていたのが、「久木野地区で活動する地域おこし協力隊」。マップで位置を検索し、「山の中だけど集落があり、小学校もある」とホッとした。一時帰国し、面接のため足を運ぶと、棚田の風景が迎えてくれた。着任が決まり、息子を連れて一足先に久木野地区へ移住した皆越さん。散歩道がアスファルトから畦道になり、季節によって田んぼの風景や昆虫が変わ

っていくことが楽しかった。「何気ない日常がいろいろな学びをくれることを実感しました。市街地育ちの私とは違う幼少期を過ごす息子を見て、こんな成長もいいなと思いました」

4ヶ月遅れで夫が移住。市の職員が夫の就職先を一緒に探し、面接にも付き添ってくれた。

### 地域に活気を生むサロンから移住者のかかりつけサロンへ

「地域おこし協力隊は2年の任期終了後の起業が条件だったので、体験型リラクゼーションカフェの開業を目標に掲げ、まずは水俣市の中心部と久木野をつなぐ取り組みを始めました」。

水俣の市街地から久木野へは車で30分ほど。山間部への移動に心理的な距離があると感じた皆越さんはきっかけづくりとして、市街地のマルシェへ出店を

始めた。

「家族でランチを味わい、お母さんが癒されている間に、お父さんと子どもは田舎体験を楽しむ。そんな雰囲気をつくるため、竹細工などの出張ワークショップや出張カフェに挑戦しました」

2018年地域おこし協力隊を卒業し、久木野で開業準備をしながら市街地で集客活動を続けた。

その後、あらゆるツテを頼って物件探しをし、ようやく今の家に出会えた。「2階の一室からは海や夕日、おれんじ鉄道も見えるんです」

現在は、リラクゼーションサロンとして営業し、時折、料理教室やワークショップを開催する。

プランは忙しい女性に好評で、水俣市の「ふるさと納税」にも採用された。現在、皆越さんのもとはさまざまな人が訪れる。「移住や転勤で水俣に来た人たちと食事会をしたり、情報交換をしたり。私も見知らぬ土地で戸惑うことが多かったから、「かかりつけのサロン」のようにサポートができればとも思います」



皆越恵美子さん  
熊本市出身、2016年より水俣へ移住。水俣市の地域おこし協力隊として着任し、都市と農村のかけはしとなる活動に携わる。2年の任期満了後、自宅の一角で隠れ家サロン「いりおのら」をオープン



地域おこし協力隊時代、久木野へ人を呼び込むきっかけとして行っていたマルシェ出店。お客さんや出店者同士の交流も生まれ、今でもそのつながりは生かされている



ビビンバやキムチなどの韓国料理教室や韓国の絵本の読み聞かせ会など多彩なワークショップも実施している



お気に入りの風景「湯の児」にて

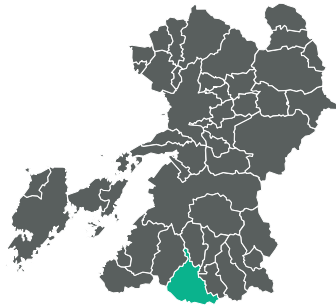
リラクゼーションサロン いりおのら®





# 熊本県

人吉市



旧国民宿舎をリノベした「osoto Hitoyoshi」。コワーキング施設として法人・個人の月契約、ドロップイン、独占利用のプランもあるほか、イベント利用も可

## 被災から2年半。 人と地域の未来をつなぐ コミュニティのつくりかた



### 一般社団法人ドットリバー

祇園下 千裕さん 西 希さん

旧国民宿舎をリノベした人吉市まち・ひと・しごと総合交流館「くまりば」で、温泉付きコワーキングスペース「osoto Hitoyoshi」を運営。学びの場づくりやワーケーション誘致などに取り組む

#### 被災を通じて感じた 関係人口の大切さ

司馬遼太郎が「日本でもっとも豊かな隠れ里」と称した人吉球磨。九州山地に端を発し、人吉市内を貫く球磨川は、日本三大急流のひとつに数えられる。この地を特徴づけるのが相良氏の700年にわたる治世によって育まれた文化。農業用水と盆地の地形を利用した「隠し田」の存在が、世界に誇る銘酒ブランド「球磨焼酎」のはじまりだ。有形・無形の文化財が数多く受け継がれる人吉球磨の後世へ誇るべき価値は、日本遺産として認められる。

そんな人吉球磨の魅力を見つめ、あらたな風を吹き込むまちづくり団体がある。

「自然と、仕事が、うまくい

く。」を合言葉にコワーキングスペース「osoto Hitoyoshi」を運営する「一般社団法人ドットリバー」だ。コミュニティマネージャーの祇園下さんはこう語る。

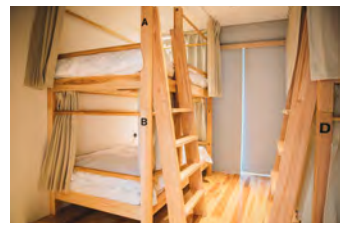
「osoto Hitoyoshi」がオープンしたのは2019年7月。テレワークが今ほど一般的ではなかった頃です。弊社の代表・富山孝治は、「場所にとらわれない働き方をする人たちが地方に関わることで、地方が元気になる」という未来を思い描いていました。人吉球磨には、雄大な自然と歴史・文化、球磨焼酎をはじめとする産業などさまざまな資源があり、それを支える人がいます。僕らはコワーキングスペースの受付ではなく、来訪者とまちをつなぐ意識で仕事をしています」

2ヶ月に1度、「オソトのじかん」というセミナーを主催。地域の人に施設を知ってもらう試みも行った。利用者数が増え、



コミュニケーションマネージャー  
祇園下 千裕さん  
大学卒業後、「人吉キャンペーンボーイ」の活動を通じて郷土愛を育み、観光以外の分野を知ろうと政治家秘書を4年経験。ジャンルを問わず全体をつなぐ役割の必要性を感じ、同社の設立メンバーに





左)天然のBGMが心地い球磨川沿いのテラス。天気の良い日には外気浴をしながら仕事したり、ミーティングやリフレッシュスペースとしても。中上)復興のサポートに訪れた人たちの名前が刻まれたウッドプレート。たくさんの思いが支えるスポットだ。中下)セミダブル、ツイン、ドミトリーと選べる宿泊棟も。右)スノーピークのキャンピングギアを活用したオープンスペース。つながりが生まれる場所でもある



上から順に)災害直後、土砂で埋め尽くされたosoto Hitoyoshi /全国各地から多くの支援者が集まった。/「ひとよしくま熱中小学校」。さまざまなジャンルの講師陣の授業が話題。/高校生から高齢者まで異なる世代と立場の人がともに学ぶ。ワークショップとの連携も。/アウトドアや産業観光がチームビルディングにも osoto Hitoyoshi



1周年を迎えようとした矢先、豪雨災害に見舞われた。「土砂が押し寄せ、館内はぐちゃぐちゃで正直、「終わった」と思いました。コロナ禍になって数ヶ月、新しい働きかたやテレワークという言葉が一般化し、全国の自治体も受け入れを始めました。身動きが取れないことが歯がゆかった」と祇園下さん。だが、復旧作業を始めると、開業からの1年でつながった延べ350人がボランティアに訪れた。彼らはまちの復興にも積極的に関わってくれた。「たくさんの人が支援の手を差し伸べてくれ、関係人口の大切さを実感しました。災害を通して、地域の中や外に新しいつながりも生まれました」

その甲斐あって、翌2月には営業再開に漕ぎ着けた。ひとよしくま熱中小学校とワークショップ誘致

被災を通じて深まったつながりの一例が「熱中小学校」だ。2020年2月、「こぼやし熱中小学校」のオープンスクールに代表らと参加。幅広い世代の人が目を輝かせて講演に聞き入る様子が可能性を感じ、人吉球磨での立ち上げを決意した。しかし、資金等の準備を進めていたときに被災。

言葉の端々に、当時の祇園下さんの葛藤と感謝がにじむ。2021年10月、「ひとよしくま熱中小学校」が開校した。「第1期は155人の受講生が集まりました。最近では高校生や20〜30代の若い受講生も目立ちます。「いち生活者」として暮らしていた若者が、「まちづくりに関わる当事者」として意識を変えていく様子が手にとるようになります」

スタッフの西さんは「学びに加え、異業種交流の場としての役割も大きい」と話す。この2年で、スポット利用がほとんどだったワークショップスペースも、滞在型ヘシフト。地域の生き残り策としてワークショップ誘致を始めると、毎月延べ300人ほどが訪れるように。求める体験や理想のアウトプットをヒアリングし、ワーク



スタッフ 西希さん 令和2年球磨川豪雨災害の復興の取り組みをきっかけに、入社。イベントや各種体験の企画・運営といった経験を生かし、ひとよしくま熱中小学校の運営や、ワークショップのコンテンツ開発などに携わる



# 熊本のスポット紹介

季節の絶景が広がるドライブ路  
千年の営みと、阿蘇五岳を一望



阿蘇山麓の大津町から外輪山へとつづく「ミルクロード」。全長約45kmのルート上には、千年の営みともいわれる阿蘇の大草原や、あか牛の放牧風景、黄金色に輝くススキなど、春夏秋冬の絶景が広がる。阿蘇五岳を一望するスポットも

海山里のおいしい！が大集結  
「くまもとの赤」ブランド



「火の国」と呼ばれる熊本は、自然や気候、人の手によって多彩な農林水産物が育まれる。なかでも「くまもとの赤」は阿蘇のあか牛、馬肉、天草大王（地鶏）、車海老や真鯛、トマトにスイカなど、選りすぐりの美味を集めた食のブランドだ

天草諸島最南端の天然ビーチ  
家族連れやダイバーにも人気



120あまりの島々が点在し、イルカや恐竜化石、南蛮文化や海山の幸など、さまざまな魅力が息づく天草諸島。下島の最南端にある「茂申海水浴場」は、白砂と黒い岩肌、青い海のコントラストが美しい天然ビーチとして知られる

県民の暮らしを支える名水  
農林の営み促進で水源涵養も



環境省の「名水百選」と「平成の名水百選」の水源・湧水群が8つあり、「水の国」とも呼ばれる熊本。毎分60tの水が湧く白川水源など、地域で守り育まれる湧水地が数多く、水道のほぼ100%を地下水でまかなう地域もあるほどだ

四季の山を愛でる人気温泉処  
地球のパワーを湯と食で体感



熊本と大分の県境にある円錐形の涌蓋山。ふもとに点在する「わいた温泉郷」は農閑期の農民たちが湯治に訪れる温泉地だった。四季のうつろいを楽しむ露天風呂や家族風呂も多数あり、蒸気を利用した「地獄蒸し」なども楽しめる

国内8拠点、国外3拠点と直結  
新ターミナルは食や土産も充実



東京から約1時間50分、大阪から約1時間10分の「阿蘇くまもと空港」。韓国・台湾・香港への直行便も有するハブ空港だ。3月23日オープンの新ターミナルビルには、熊本の美味を集めた飲食ゾーンや免税店なども充実し、新たな名所に

## 移住・定住に関する相談窓口

くまもと移住定住支援センター

熊本窓口（熊本県地域振興課）

TEL：096-333-2181

東京窓口 TEL：080-2125-1656

大阪窓口 TEL：090-9288-0046

福岡窓口 TEL：080-6367-7559

<https://www.kumamoto-life.jp/>



熊本県移住定住アドバイザー 立花恵香さん

**熊本ではどんなライフスタイルが叶えられますか？**

現在、日本で一番新しい政令都市である熊本市の都市型の暮らしや、国立公園を有する阿蘇・天草での山や海に囲まれた自然豊かな暮らしなど、多様な選択ができることが特徴です。

熊本で今ホットな話題は何ですか？

熊本で今ホットな話題は何ですか？  
半導体工場の建設が始まったことにより、工場ができる菊陽町だけでなく周辺市町村へもその効果が波及し、様々な分野においてこの地域全体がこれまでにないくらいの注目を集めています。



熊本県への移住について相談したい場合はどうすればいいですか？

東京・大阪・福岡・熊本に相談窓口となる「くまもと移住定住支援センター」を設置しています。各窓口相談員を配置して熊本への移住を希望する方のサポートを行っています。お気軽にご相談ください。